

アンドレ・ジッドの方法 XVI

——『インモラリスト』— そのマニュスクリを追って(6) ——

鈴木 たけし

今回は第V章と第VI章に限る。この二章で、ミッシェルは、病の回復の後、自分が気づいていく変化を、今までと異なり、思考をし、記憶をし、論理的に説明しようとする。

第V章

第V章は、全く異なる対立した内容で、二つの部分に分けられる。すなわち、生と死の対立だ。生が主題となる前半を第1部、死が主題となる後半を第2部とする。

1. 第1部 生

変らずビスクラに滞在していたミッシェルは、突然、長い雨期が終り、晴れ渡るアフリカの大地を見る。彼は、この自然を自分の分身のように感じる。

——長い日々、水没していたアフリカの大地が、今、冬から目覚め、水に酔い、新しい樹液にはちきれんばかりになり、度外れた春に笑い、そしてその反響を私は、心の内で自分の複製のように感じた。p.24

「複製」は、テキストの double の訳だが、マニュスクリでは当初、répétitionであった。美術用語で複製を意味する。まさしく、自己と自然を一体化している。自然イコール、ミッシェルだ。ミッシェルは、健康に自信をとりもどしつつある。さらにある余力までもちはじめる。

——1日に半フランしかかからない彼ら（アズールとモクティル）の軽い友情をまだ享受していたが、やがて彼らに飽きた。彼らの健康の手本を必要とするほど弱くなくなり、私の喜びに必要な糧を彼らとの遊びの中にもう見つけることもなくなったので……p.24

ここで、「享受する」は、savourerだ。事物を感覚的に享受する意。直截で肉体的な語だ。またこの享受には、値がつき「半フラン」となる。また、自分の喜びに必要な「糧」は、aliment

で、食物そのものだ。

彼は、その余力ではじめて、自分の「精神と感覚」の喜びを、妻マルスリーヌにむけようと思う。

——私は、自己の精神と感覚の昂揚をマルスリーヌへむけた。……それ以来、私の健康とともに、私の愛が大きくなるのを感じていた。p.24

はたして「精神」は必要なのだろうか。「自己の精神と感覚の昂揚」の「感覚」は、マニユスクリでは chair（肉体）と直截だ。前掲の「享受する」「半フラン」「糧」とつづき、直截で肉体的で物質的な語句が使われる。それらをうけるかのように、明快な官能的行為で、この段落はとじられる。

——マルスリーヌを欲したのは、一ヶ月余の後だった。p.24

2. 第2部 死

第2部は、この章以前にすでに語られ、この章の第1部で要約されているような自然の充溢と健康をとりもどした人間の生の讃歌から、うって変って、死の記述となる。

春が訪れ、青空の下、自然は澆刺と冬から蘇えり、作者は、この自然と重なりあう自分を見出していた。

しかし、第2部は、まず次の一文から始まる。

——私は最後の夜を思い出す。p.25

それ以前、過去と未来を否定し、現在の瞬間に生きる、あるいは生きざるをえなかった作者が、過去の思い出を語る。たとえ、後の作者の語る時点からの思い出としても、第1部と違う思い出の書き出しといえる。

そして、思考がはじまる。

——マルスリーヌは眠っていた、私は考える。p.25

それまで、考えることなどしなかった、あるいはできなかった語り手が、今、何を考えるのだろうか。

——私は、幸せな一種の熱が燃えるのを身内に感じていた。それは生命そのものだった。

p.25

まず、昼の燃え上る生命の余韻を享しむかのようだ。しかし、夜の静けさのなか、自然とそれを反映した彼の生命は、まったく違う様相へと変っていく。夜がふけ、物音ひとつしない静けさ、大気も眠っているようだ。ただアラビア犬の遠吠えが聞こえる。目の前の庭を彼は観る。

——もはや色もなく生命もない規則正しく並ぶ椰子は、ずっと変わらず動かないように見えた……しかし、眠りの中でもなお生命の躍動がみられるはずだ。——ここでは、何も眠っているように見えない。全てが死んでいるようだ。この沈黙に私は不安になっていた。そして突然、まるで抗議するかのように、この沈黙の中で、私の生への悲劇的感情がはっきりと確かめられ、悲嘆に暮れるかのように、新たに私を襲った。この感情は、とても激しく、ほとんど痛ましばかりで、そしてさらに激烈なので、野獣のように叫ぶことができたなら、私は叫ばんばかりだった。 p.25

ここで初めて死が語られる。思考が始まると同時に死が語られる。夜の静けさの中で、自然は眠っているとミッシェルは思っていた。ところが予想に反し、眠っているのではなく死んでいるように感じられる。彼は異常に不安になる。そこで生命を確かめるため……

——私は手をとった。私は覚えている。左手を右手の中に握った。私はそれを顔に持っていこうと思って、そうした。何故か？ 私が生きていること、そしてそれがすばらしいとわかることを確かめるためだ。私は額に、脛に触れた。突然、戦慄が走った。

その日が来るだろう。私は考えた。その日が来るだろう。とても喉が渇いて求める水さえ、私の唇まで持っていくことさえ、十分な力をもはや失なう日が来るだろう……。 p.25

思考が盲目的な生と肉体への讃歌を黙させ、病と死という対蹠点を思い起させる。ミッシェルは、これを思考に刻みこみ、さらに偶然とはいえ、書物にはじめてふれる。

——私は、この夜を定着しようと思った。この記憶を私の思考に刻みつけることで、それを抱き続けようと思った。何をするのか定かでないまま、テーブルの上の本を手にした。——聖書だった——適当にそのページを開くままにした。月明りのなか、かがみこみ私は読むことができた。私は、ペテロへのキリストの言葉、ああ、これらの言葉を私はもはや忘れることができないだろう。「今、あなたは自分で腰ひもをしめる、そして行きたいところに行ける。けれどあなたが老いたとき、あなたは手をさしのべるだろう……。あなたは手をさしのべるだろう……。」

翌日、夜明けに、私たちは出発した。pp.25-26

「翌日、出発した」という第一部と同じ文で第2部もとじられる。昼と夜、生と死、感覚と思考がわずかにプレイヤード版2ページ程の見開きに、対蹠点を明確にしながらか、対称をなしている。安定した文体と、逆に明確に対立する生と死という論理は、作品における第1部の中間に位置するこの章で、まるでこの書の第1部、あるいは書物全体を要約しているかのようだ。

3. マニユスクリについて

マニユスクリについては、以上のレジюмеと分析に深くかかわるものだけをここで示し、全体は、最後にまとめて記します。

p.24 ll. 19-20

Comme la répétition en moi-même

→comme le double en moi-même

le double の意味は、répétition（美術用語、制作者自身によるレプリカ・複製）であることが明らかになる。ミッシェルと自然の一体化を示す。

p.24 l. 27

chairs→sens

感覚の意味するものが官能的肉体であることが明らかになる。

p.24 l. 30

/×solitaire et chagriné/→/×fuyante et rétive /→fuyante et bizarre

とらえどころのない (fuyant), 危妙な (bizarre) の方が、語り手の未だ未知の気分を示すのにふさわしい。

p.24 ll. 33-34

→ナシ sans doute....., car.....

「私は真実（事実）を語っている」をうける文として「多分 (sans doute)」でぼやかし、「なぜなら (car)」で説明することで、事実から遠のけようとする作者の心理が反映しているようだ。

pp.25-26 ll. 62-79

je pris.....よりナシ→テキスト

マニユスクリでは、聖書の引用による悲劇的側面が中途半端で終わっていた。

第VI章

この章はとても奇妙な印象をうける。ひとつは、マルスリーヌが見当らないことだ。彼女は、物語の冒頭から、いつもミッシェルの傍らにいた。新婦のマルスリーヌ、病の夫を世話するマルスリーヌ、回復を願う夫のエゴイスティックな言動にもめげぬマルスリーヌ、その彼女が消える。章中、一ヶ所、ホテルとなった古い修道院に「私たちは」とまったとある。それだけがマルスリーヌの影となる。

なぜなのだろうか。この疑問を出発点として、この章のレジメと分析を試みる。

この章は、大かた二つに分けられる。それを第1部 思考、第2部 非=思考とする。

1. 第1部 思考

ミッシェルは、病に気をとられることが少なくなり、「私の生は、確か意識的なものになった」と語り出す。いくぶんか病のなごりを感じるが、回復したようだ。そして、回復した自分は過去の自分にもどったとみえたが、それはあやまりで、むしろ、自分が全く変わっていたと宣言する。

——この地では、むしろ全てがさらに私を驚ろかすものを私に教えていたのだ。私は変わっていたのだ。p.26

いったい、何がどのように変わったのだろうか。ミッシェルは、それを説明し続ける。

まず、研究を再開しようとするが、研究にたいする好みが変わっていた。現在という感覚が過去・歴史への好みを変えていたのだ。彼は、二つの経験によりそれを証明する。まず、

——過去の歴史は、今や、ビスクラのあの小さな庭での夜の影の恐ろしい不動、あの静止、死の静止と私の目にはみえる。p.26

次に今ひとつの例も過去の経験にうらづけられる。

——……シラクサでテオクリトスを再び読み、美しい名の羊飼いたちとは、私がビスクラで愛した者たちそのものと想った。p.27

二つの経験にうらづけられ、ミッシェルの好みは、現在の感覚に変わる。

——……今や、もしまだ歴史を好むことができるとすれば、それは、歴史を現在の中で想像することだ。p.26

さらに過去の歴史と死が重ねあわせられ、死にミッシェルは恐怖をおぼえる。第V章では、生と死が対称し語られていた。この章では、生のみが肯定され、死は拒否されていく。

——……廃墟は、それが死んでしまったことで、私を悲嘆にくれさせる。そして私は、死が恐ろしかった。p.27

つづく結論めいた文は、学者の論文のように平列された段落となる。両段落とも対をなし、「ついに……に至る」で文が始まる。

廃墟より生きた自然を好むミッシェルは、

——ついに私は、廃墟から逃げ出すに至った。p.27

対となる文は、

——ついに私は、この科学（歴史研究）を軽蔑するに至った。p.27

このあたりから、この第1部の特異な文体操作があらわれる。自己の論理と対立するものを使って、対立するものを否定し、自己の論理を肯定してゆく方法だ。知的な歴史研究について語りながら、「新しい人間」に変わった自分、知性を否定し、感覚に生きる人間を語っていく。すなわち、

——……人間としては、私は自分がわかっていたのか？ 私は生れたばかりだ。今のところ、私はどんな人間に生れたかわからない。これこそ私が知らねばならないことだ。p.27

さらに、彼が変わってあらわれた人間についてこう語る。

——死ぬと思った者にとって、ゆっくりとした回復過程ほど、悲劇的なものはない。死の翼がふれた後、大切であるとみえたものが、もはやそうでなくなる。大切でないともみえた他のものが、あるいは存在していること自体知らなかったものが大切になる。……全ての知識の心の中

での集積が、おしろいのようにはげ落ちる。そしてところどころに肉体そのものを裸にして見せる。すなわち隠されていた真実の人間を。p.27

彼は、何に変わったか、ここではっきりする。「真実の人間」に変わったのだ。しかし、それは、「肉体」である。肉体ゆえ、知性を否定せざるをえない。前章、第V章では、相対立する生と死をのべるにあたり、死の悲劇性を説く書物として聖書がひかれたが、ここでは聖書が否定される。

——私が発見したと主張する者は、その日以来、真実の人間となった。あるいは、福音書がもはや受け入れることのない者、「古き人」となった。私の周囲の全て、書物、師、両親、そしてかつては、私自身が抹殺しようと努めていた者だ。p.27

このようにミッシェルは、過去の全てを否定する。否定されるものを列挙すると、歴史研究、学殖、廃墟、過去に得られた知識、聖書、書物、師、両親、教育、かつてのモラル・倫理、弱弱しく勤勉な自分となるだろう。要約すれば、教育と倫理と思考だ。

第VI章の前半をしめくくるあたり、やはり対立するものを使い、それを否定し、自分の論理を肯定する方法がとられる。

——……その日以来、私は、教育がその上に描いてきた……第二の人間を軽蔑した。これらの上に積み重なるものを払い落さねばならなかった。

そして私は、自分をパランプセストにたとえた。私は学者の喜び、最近の文章の下に、その同じ紙の上に、とても古いがはるかに貴重なテキストを発見した学者の喜びを味わった。pp.27-28

パランプセストという古文書の研究方法をとりながら、彼の新しい人間の説明にすりかえる。学問、学者を否定するのに、学者を例としてあげる。まさしくパランプセストの二重写しによる否定である。論理から非論理への上手な移行、対立するものを利用して、彼の「真実の人間」を説こうとする。

2. 第2部 非=思考

先に述べたように、第VI章を前半第一部と後半第二部と主題により分けた。前半第一部は、ミッシェルが変わったこと、どのように何に変わったかについて語られた。それは、思考により研究をめぐり説明された。後半第二部では、突然、思考が終り、前半とは逆な唐突な変化が、文体と意味のなかに、巧みにしのぶこむ。それをみてみよう。

前半に続きミッシェルは、自己の変化について語り続ける。しかし、次のような説明となる。

もはや彼は、以前のモラルにふさわしい、弱弱しい勉強家ではないと語り、ついで……

——……そこには、単なる回復以上のものがあった。

生命の増大、もりかえす勢い、より豊かでより熱い血の充溢があった。その血は、私の思考にふれ、ひとつひとつの思考にふれ、全てに注入され、私の体の最も奥深い繊細で隠された琴線を揺り動かし色づけることになる。

なぜなら、強健であろうと虚弱であろうと、人はそれに慣れる。人のもつ力にしたがって人はつくられる。しかしその力が増大すれば、もっとそれ以上に何かができるようになる……。

いや当時は、これら全ての考えを私はもっていなかったのだ。それで、ここに描いた私は、私をゆがめる。

本当のことを言うと、私は少しも考えはしなかった、少しも自己省察などしていなかった。ただ幸せな運命が私を導いていたのだ。p.28

ここで論理は、突然、飛躍する。この章の前半、ミッシェルは、あらゆる教育が彼にもたらしたものを否定するために、ある説得力のある説明をのべつづけていたようにみえた。学者の研究手法、パランプセストまで例として、否定を論理的に思考をもってすすめてきたようにみえた。

しかし、生命の増大、血の充溢が、思考の琴線にふれる。その瞬間、生は思考を否定する。それまでの思考は、突然遮断され、抹殺される。これまで彼の語ってきたことは、何なのだろうか。巧妙にある論理的説得を読者にしてきたが、対立するものを使って対立するものを否定してきたが、死を否定し生を肯定しようとしてきたが、突然、その全てを、思考そのものを否定しようとする。まさしく前掲の次の三文に要約される唐突な結論となりおおせる。

——これら全ての考えをもっていなかったのだ。

ここで描いた私は、私をゆがめる。

本当のことを言うと、私は少しも考えはしなかった、少しも自己省察などしていなかった。

読者は、それまでの話しが、全てうそだったの強えられる。そして唯一の結論ともいうべきものは、次の一文となる。

——ただ、幸せな運命が私を導いていたのだ。

さらに「私が変わった」ことの秘密を他者に隠しながら、それが自然にあらわれるのを待つと彼はいう。ということは、前半で説明された新しい人間は、まだあらわれておらず、未知のもの

いうことになる。そしてそれを待つにあたって、彼は、官能的に自己に没頭する。それは「神々しい」ものになりおおせ、聖書の否定の上、神となりかわるものになるらしい。それが「新しい人間」であるらしい。

——私は、あまり性急な視線が、私のゆっくりとした変化の秘密を邪魔することを恐れていた。隠された性格があらわれるのに時間をかける必要があった。それらを形づくろうと努めまい。私の神経をほっておく、というより休耕地のままにして、私は官能的に私自身に没頭する。私に神々しいとみえるもの全てに没頭した。……新しい人間と叫びながら。 p.28

ミッシェルは、だから過去の遺物であるパエストゥムの美しい寺院にも立ち寄らない。しかし、彼の待ち望むものが、さらに未知のものであることをにおわすように、二年後に何かわからぬ神に祈るために、そこにやって来ることになるのだがを加える。この未来の先取りは、V章には、「(ビスクラの) この魅力が私を再びここにつれもどすことになるのだが」にもある。読者は、物語の未来に、何か未知で、不確定で、不安なものを感じるだろう。次にミッシェルは、明確にそれを語る。

——完成しうる人間のようなもの以外、私は自分自身に興味をもてることができるだろうか。私がぼんやりと想像するあの未知の完成、私の意志が、その完成にこそたどりつくことだけに、あれ程高揚したことはかつてなかった。 p.28

完成しうるということは、未完成だということだ。論理的に「新しい人間」を語りつつ、それが曖昧となり、未知のものになっていく。そしてその完成の努力は、外側から、表面から、表皮から始まる。いいかえれば、内面、精神、論理の拒否である。新しい人間になる意志がする最初のことは、

——この意志全体を私の肉体を丈夫にすること、肌を焼くことに使った。 pp.28-29

ラヴェロの奇妙で美しい自然の中で、ミッシェルは体をきたえる努力をする。過去の苦しみを忘れたかのように、健康のあまりにはやい回復に驚く。もしかしたら、それ程の病気ではなかったのかと疑うくんだりでは、先の論理的展開 (p.6) と同じ「……するにいたる」が続く。ここでは、先の論理ではなく、具体的で直截な彼の病についてのくんだりとなる。

——私は、大げさにしていたと思うにいたる、そんな病気であったことを疑うにいたる、吐い

た痰を笑うにいたる、回復がもっともっと厄介なものでなかったことを残念に思うにいたる。
p.30

さらにミッシェルは、農民たちの日焼けした肌にくらべ、自分の生白い肌を恥じ、人気のない岩地に行き肌を焼く。

——……やがて私は火傷のようなひりひりとした痛みにおおわれた。全ての私の存在が皮膚の方へ流れ出していた。p.30

この逆流は、まさしく内面の完全な否定となる。二週間、毎朝、彼はこの岩地に通った結果、

——ひきしめられた私の表皮は、たえず汗をかくことはなくなり、それ自体の熱で、自らを守ることができるようになった。p.30

まさしく表皮 (épiderme) が全てとなる。この日焼けの日々の文の冒頭は、常に、「ある朝」ではじまる。この不特定な日付は、具体性よりむしろ抽象性を感じさせる。論理的説明から非論理に変わりながら、これもひとつの論理だとおわせるようだ。

その論理は、日焼けした表皮だけの人間を提示する。教育的、歴史的、思想的内容物を全て取り去り、中身を空洞にした人間、これがミッシェルのいう真実の人間なのだろうか。

そして朝の中でも最後の朝は、はじめて四月半ばと特定される。具体的な経験として語られる。

——終りのころのある朝——四月半ばだった——私はさらに思い切ったことをした。すでに話した岩のひとつの窪みに、澄んだ泉が流れていた。そこでは、泉は、かなり僅かな量だが、それでも滝となって落ちていた。……その滝の下にかなり深い池がうがかれていた。そこには、とても清らかな水がたまっていた。三度も私はそこに来た。渇きと欲望にあふれて、私は身をかがめ、土手の上に寝そべった。私は、長いあいだ底の磨かれた岩を見つめていた。そこには汚れもなく、草もはえていないとわかった。太陽の光が揺れ、色とりどりに輝き、さしこんでいた。

四日目、あらかじめ決心していたように……澄みきった水まで私は進んだ。そして何も考えずに、一遍に体全身でとびこんだ。すぐにかじかんで、水から出て、日のあたる草の上に横になった。そこには、匂う薄荷の葉が重なりあいはえていた。私はそれを摘み、それで濡れた熱い私の体をふいた。私は、長いあいだ、もう少しも恥かしさを感じず、自分の体を視た。まだ強健とはいえないが、しかしそうなりうる、調和のとれた、官能的でほとんど美しいといえる

自分を見出していた。pp.30-31

第VI章後半第二部は、完全な生、肉体というより外形の讃歌で終る。この章前半では、思考によりミッシェルの変化が語られた。後半では思考が終る。思考なしで、彼の変化を語らねばならない。それは、苦しい論理の展開せねばならない。知性すなわち論理を否定する論理をつくらねばならない。第VI章は、この唐突な変化を導くため、文体と意味が巧みに操作されてきたといえるだろう。

そしてこの章は、ミッシェル一人の思想の変化の開陳を目的としている。だからマルスリーヌは、影となり消えていったようだ。前章第V章では、生と死があるバランスをもって語られた。第VI章では、序々に、巧みに、そのバランスをくずし、生の肯定、それもナルシスティックな彼一人の生の肯定にいたる。だから、マルスリーヌはいない。

マニュスクリ

マニュスクリについては、はじめにマニュスクリ文、次にテキスト文を記した。マニュスクリ→テキスト文。書き換えが2回以上あるばあい、最後の文がテキストとなる。マニュスクリで、線などで消された文、黒く覆われたものもすかしてみることで再現した。これらは×印で示した。なお、ページ・行数は、この論集のものである。

V

p.24 l.0

ナシ→V

p.24 ll.2-3

sitôt après les pluies éclata la chaleur subite→テキスト

p.24 l.5

nous nous ét...→Je m'étais endormi au bruit d'un ruissellement: je me réveillai dans l'azur→テキスト

p.24 ll.10-12

/×Marceline vint/×Nous voulûmes sortir/, la boue nous retint encore→テキスト

p. 24 l. 13

dans le verger→au verger

p. 24 l. 15

ナシ→africaine

p. 24 l. 15

savais→connaissais

p. 24 l. 17

éclatant の後 : /×et comme rire/→ナシ

p. 24 l. 18

Riant→elle riait

p. 24 ll. 19-20

comme la répétition en moi-même→テキスト

p. 24 l. 21

/×me coûtait→ne coutait que

p. 24 l. 23

sentisse→eusse

p. 24 l. 26

/×tournais/→reportai→retournai

p. 24 l. 26

(l'exaltation の後) nouvelle→ナシ

p. 24 l. 27

chairs→sens

p. 24 l. 27

(sens. の後) /×Elle le comprit aisément/→ナシ

p. 24 l. 27

(aperçus の後) vite→ナシ

p. 24 l. 30

/×solitaire et chagrinée/→/×fuyante et rétive/→fuyante et bizarre

p. 24 ll. 33-34

j'étais bien faible→sans doute j'étais bien faible car...

p. 25 l. 36

semblait croître→augmertait

p. 25 l. 37

là-bas→à Biskra

p. 25 l. 45

/×brulé/→/×troublé/→/×agité par/→brulant d'→brûler

p. 25 l. 46

/×je me sentais par le sentiment de la vie/→ナシ

p. 25 ll. 52-54

où le mur en face de moi portait une ombre géométrique→テキスト

p. 25 ll. 58-59

de nouveau m'envahit→m'envahit de nouveau

p. 25 l. 60

ma (下線で強調) →ma

p. 25 l. 61

plus...plus...→si...si...

p. 25 ll. 61-62

que jamais→que j'en aurais crié

p. 25 l. 64→ l. 72

je la tâcherai. Je fis cela comme une chose très admirable. Une frisson me saisit: je rentrai; je ne voulais pas/×s'affirmer/encore sentir ma vie. Je désirais fixer encore le souvenir de cette nuit par quelque chose. →テキスト

p. 25 l. 72

indécis dont je devais ma souvenir→テキスト

p. 25 l. 72→ l. 79

ナシ→テキスト

※別の小紙に次のメモがある。

état physique

examen-résolution

dîner est-il le temps encore...

prières verre ou flûte entevée

les petits

promenade l'ardeurs de chèvre

sensualité

course en voiture de le (ママ) désert

progrès

mauvais temps

le voleur

la protégée

visite à la tente de Mhammark

retour du printemps

fenêtre ouverte la nuit
 lune sur la petite cour
 Luissements énivrantes
 dans le silence

départ—son travail
 —nouvelle conception de la philologie

VI

p. 25 l. 0

ナシ→VI

p. 26 l. 31

ナシ→d'un musée, ou mieux

p. 26 ll. 32-34

(dont 以下なく, 次文のみ)

leur réalité affective ne m'était jamais apparue→ナシ→テキスト

p. 26 ll. 34-35

à présent ce qui pouvait m'y plaire encore→テキスト

p. 26 l. 35

(前掲 dont 以下ナシがこの行に移る)

les plantes d'un herbier dont la sécheresse définitive /×eût aidé/ aidât à oublier qu'un
 jour elles avaient été vivantes

p. 26 ll. 39-40

dialogueurs→au beau nom

p. 26 l. 49

/×les citronniers doux/→les citrons

p.27 l. 49

presque la douceur...→l'acide

p.27 l. 55

/×lieu/→rapport

p.27 ll. 60-61

mon effort fut de l'apprendre→テキスト

p.27 l. 62

(crut の後に) y→ナシ

p.27 l. 66

pas même→même pas

p.27 l. 67

(connaissance の後) /×et de toutes les choses/→ナシ

p.27 l. 67

/×s'effrite/→s'écaille

p.27 l. 69

(se の後に) y→ナシ

p.27 l. 73

parents, maîtres→maîtres, parents

p.27 l. 75

(mais の後) /×aussi plus utile à découvrir et plus sérieusement valeureux→テキスト

p.27 l. 78

avait su par-dessus donner→テキスト

p.27 l. 78

(surcharges の後) Mais elles ne doutaient pas de moi seul. Et de quelle épaisseur hélas! de père au fils ne s'étaient-elles pas augmentées. →ナシ

p.28 l. 83

supprimer→effacer

p.28 l. 83

(effacer の後) /×sauver de moi les surcharges/→ナシ

p.28 l. 98

(devait の後) une à une→ナシ

p.28 l. 90

(toucher の後) évacuer→ナシ

p.28 l. 92

(être の後) Ce n'est pas tout d'être

p.28 l. 92

plus ou moins fort ou faible, c'est de le devenir→ナシ

p.28 l. 92

force→robustesse

p.28 l. 93

dont il s'expose→qu'il a

p.28 l. 95

(Toules の前に) Mais→ナシ

p.28 l. 96

mon récit→ma peinture

p.28 l. 97

ナシ→ne m'examinais point

p.28 ll. 97-98

et je croyais plutôt qu'une fatalité heureuse me guidait. →テキスト

p.28 l. 98

(gardait の後) Autant que j'examinais volontier naguère→ナシ

p.28 ll. 98-99

Autant à ce moment je m'examinais en pensant l'examen pourrait déranger le mystère de ma lente transformation. →テキスト

自己の視点から他者の目に変える。

p.28 l. 100

occulés→effacés

p.28 l. 105

un à→joint

p.28 ll. 109-110

/×qui me semblait/→que je croyais

p.28 l. 111

de→pour

p.28 l. 113

Sagerte et Salinante→Agrigente

p.28 l. 114

je ne voulais point m'arrêter→je ne m'arrêtai point

p.28 l. 116

※deux ans plus tard が dieu の後にきている。このあたり、まだ未知の、これから明らかに
なるかも知れぬ思想を描くのに作者は苦勞していることが見うけられる。

p.28 ll. 117-118

M' intéressai-je à moi-même alors?

→Pouvais-je m' intéresser a moi.

p.28 l. 119

ナシ→jamais

p.28 l. 121

mon→cette

p.29 l. 122

me→le

p.29 ll. 122-123

nous avons quitté la route de Naple à Salerno et de Salerno avions gagné Ravello: c'est un
village exquis. →テキスト

p.29 l. 127

Plus...rivage, ナシ→テキスト

p.29 l. 129

au temps de Frederic II →sous la
domination normande

p.29 l. 139

Au-dessus 以下ナシ→テキスト

p.29 ll. 142-143

près de la mer des citroniers→des citroniers près de la mer

p. 29 l. 147

pénètre→entre

p. 29 l. 149

traverse→pénètre

p. 29 l. 150

(les citrons の後) merveilleux→ナシ

p. 29 l. 151

semblent presque→sont

p. 29 l. 151

ナシ→et verdâtres

p. 29 l. 159

ナシ→content

p. 29 l. 161

ナシ→plus

p. 30 l. 166

j'eusse jamais été si...→テキスト

p. 30 l. 167

sourire→rire

※p. 30 l. 168

l. 168 の後、次の文がある。→ナシ

Ainsi me contentai-je pour toute action et tout travail de ces exercices physiques qui certe impliquaient une morale déjà changée, car avant je ne m'occupais point de mon corps et d'une autre action qui peut paraître ridicule mais que je ne pense que plus tard

de mon être nouveau, des actes étonnantes pour moi-même allaient naître mais j'attendais que l'être fut formé——Force de vivre en attendant

第VI章後半の内容が、あられずりだが、よりわかりやすく述べられている。

p.30 l. 169

je me soignais→Je m'étais soigné

p.30 l. 171

les soins→aux soins

p.30 l. 172

comme au jeu→comme à un jeu

p.30 l. 173

(ma sensibilité の前) de→ナシ

p.30 l. 174

(changement) de température→de la temperature

p.30 l. 176

(hyperesthésie の後) éperdémique→ナシ

p.30 l. 177

ナシ→de vaincre cela

p.30 l. 186

ナシ→vite

p.30 l. 186

(et の前) Car mon corps tout entire frissonnant semblait tout honteux d'être vu

p.30 ll. 194-195

Je sentais 以後ナシ→テキスト

p.30 l. 196

(souffle の後) mais l'air sec, le soleil empêchaient la sueur, je ne prenais pas froid, je le savais→ナシ

p.30 ll. 197-198

Je sentis bientôt de partout une cuisson délicieuse; mon sang me paraissait affluer vers ma peau. Je n'avais plus de tristesse à me voir. →テキスト

p.30 l. 201

m'enveloppais→me recouvrais

p.30 l. 203

s' envelopper→se protéger

p.30 ll. 205-206

au début→au milieu

p.30 l. 207

/×où je cultivais mon bien être→dont je parle

p.31 l. 210

/×quelque temps→très pure

p.31 l. 210

trois matins→trois fois

p.31 l. 212

regardé→contemplé

p.31 ll. 213-214

ne se découvrait pas→l'on ne découvrait pas

p.31 l. 217

(réfléchir の後) y attendre→ナシ

p.31 l. 217

l. 217 の後に次の文→ナシ

Des châtaigniers au feuillage naissant, des coudriers des bouleaux se recourbaient autour de moi faisant une sorte de bocage; au-dessus de moi leurs rameaux se croisaient, entouraient ce lieu d'un mystère que le soleil seul traversait.

p.31 l. 218

ナシ→vite

p.31 l. 220

(les feuilles の後) /×dans mes mains/

p.31 l. 222

(honte aucune の後) avec étonnement→ナシ

※p.31 l. 224

l. 224 の後, 次の文がある。→ナシ

Cependant un désir, non pas nouveau, mais inconnu quant à sa force gonflait et raidissait ma chair.

Quand j'étais seul loin d'elle, un grand élan d'amour précipitait alors mon sang vers Marceline — et parfois me levant brusquement j'allais la trouver en courant sitôt près d'elle, un sentiment retors que je vous dirai tout à l'heure, mais que, si je ne sais assez bien exprimer. Il vous semblera, je crois, impossible à comprendre — me faisait et de jour en jour differer.

Le lendemain, nous quitions Ravello pour Sorrente.

マニユスクリではマルスリーヌがあらわれるが, しかしすぐに消える。

テキスト

プレイヤー版レシ・ソチ・ロマン

pp.395-402

V

1 N OTRE séjour à Biskra ne devait pas se prolonger
2 longtemps encore. Les pluies de février passées, la
3 chaleur éclata trop forte. Après plusieurs pénibles jours,
4 que nous avions vécus sous l'averse, un matin, brusque-
5 ment, je me réveillai dans l'azue. Sitôt levé je courus
6 à la terrasse la plus haute. Le ciel, d'un horizon à l'autre
7 était pur. Sous le soleil, ardent déjà, des buées s'éle-
8 vaient; l'oasis fumait tout entière; on entendait gronder
9 au loin l'Oued débordé. L'air était si pur et si beau
10 qu'aussitôt je me sentis aller mieux. Marceline vint;
11 nous voulûmes sortir, mais la boue ce jour-là nous
12 retint.

13 Quelques jours après nous rentrions au verger de
14 Lassif; les tiges semblaient lourdes, molles et gonflées
15 d'eau. Cette terre africaine, dont je ne connaissais
16 pas l'attente, submergée durant de longs jours, à présent
17 s'éveillait de l'hiver, ivre d'eau, éclatant de sèves
18 nouvelles; elle riait d'un printemps forcené dont je
19 sentais le retentissement et comme le double en moi-
20 même. Ashour et Mektir nous accompagnèrent d'abord;
21 je savourais encore leur légère amitié qui ne coûtait
22 qu'un demi-franc par jour; mais bientôt, lassé d'eux,
23 n'étant plus moi-même si faible que j'eusse encore
24 besoin de l'exemple de leur santé et ne trouvant plus
25 dans leurs jeux l'aliment qu'il fallait pour ma joie,
26 je retournai vers Marceline l'exaltation de mon esprit
27 et de mes sens. A la joie qu'elle en eut, je m'aperçus
28 qu'avant elle était restée triste. Je m'excusai comme
29 un enfant de l'avoir souvent délaissé, mis sur le compte
30 de ma faiblesse mon humeur fuyante et bizarre, affirmai
31 que jusqu'à présent j'avais été trop las pour aimer,
32 mais que je sentirais désormais croître avec ma santé
33 mon amour. Je disais vrai; mais sans doute j'étais bien
34 faible encore, car ce ne fut que plus d'un mois après

35 que je désirai Marceline.

36 Chaque jour cependant augmentait la chaleur. Rien
37 ne nous retenait à Biskra — que ce charme qui devait
38 m'y rappeler ensuite. Notre résolution de partir fut
39 subite. En trois heures nos paquets furent prêts. Le
40 train partait le lendemain à l'aube...

41 Je me souviens de la dernière nuit. La lune était
42 à peu près pleine; par ma fenêtre grande ouverte
43 elle entra en plein dans ma chambre. Marceline
44 dormait, je pense. J'étais couché, mais ne pouvais dormir.
45 Je me sentais brûler d'une sorte de fièvre heureuse,
46 qui n'était autre que la vie... Je me levai, trempai
47 dans l'eau mes mains et mon visage, puis, poussant
48 la porte vitrée, je sortis.

49 Il était tard déjà; pas un bruit; pas un souffle; l'air
50 même paraissait endormi. A peine, au loin, entendait-on
51 les chiens arabes, qui, comme des chacals, glapissent
52 tout le long de la nuit. Devant moi, la petite cour; la
53 muraille, en face de moi, y portait un pan d'ombre
54 oblique; les palmiers réguliers, sans plus de couleur ni
55 de vie, semblaient immobilisés pour toujours... Mais
56 on retrouve dans le sommeil encore une palpitation de
57 vie, — ici rien ne semblait dormir; tout semblait mort.
58 Je m'épouvantai de ce calme; et brusquement m'envahit
59 de nouveau, comme pour protester, s'affirmer, se
60 désoler dans le silence, le sentiment tragique de ma vie,
61 si violent, douloureux presque, et si impétueux que j'en
62 aurais crié, si j'avais pu crier comme les bêtes. Je pris ma
63 main, je me souviens, ma main gauche dans ma main
64 droite; je voulus la porter à ma tête et le fis. Pourquoi?
65 pour m'affirmer que je vivais et trouver cela admirable.
66 Je touchai mon front, mes paupières. Un frisson me
67 saisit. Un jour viendra — pensai-je, — un jour viendra
68 où même pour porter à mes lèvres même l'eau dont
69 j'aurai le plus Soif, je n'aurai plus assez de forces... Je
70 rentraï, mais ne me recouchai pas encore; je voulais
71 fixer cette nuit, en imposer le souvenir à ma pensée, la
72 retenir; indécis de ce que je ferais, je pris un livre sur
73 ma table, — la Bible, — la laissai s'ouvrir au hasard;
74 penché dans la clarté de la lune je pouvais lire; je lus
75 ces mots du Christ à Pierre, ces mots, hélas! que je ne
76 devais plus oublier; «Maintenant tu te ceins toi-

77 même et tu vas où tu veux aller; mais quand tu seras
78 vieux, tu étendras les mains...》 Tu étendras les mains...
79 Le lendemain, à l'aube, nous partîmes.

VI

1 J E ne parlerai pas de chaque étape du voyage. Cer-
2 taines n'ont laissé qu'un souvenir confus; ma santé,
3 tantôt meilleure et tantôt pire, chancelait encore au
4 vent froid, s'inquiétait de l'ombre d'un nuage, et mon
5 état nerveux amenait des troubles fréquents; mais mes
6 poumons du moins se guérissaient. Chaque rechute
7 était moins longue et moins sérieuse; son attaque était
8 aussi vive, mais mon corps devenait contre elle mieux
9 armé.

10 Nous avons, de Tunis, gagné Malte, puis Syracuse; je
11 rentrais sur la classique terre dont le langage et le
12 passé m'étaient connus. Depuis le début de mon mal,
13 j'avais vécu sans examen, sans loi, m'appliquant simple-
14 ment à vivre, comme flait l'animal ou l'enfant. Moins
15 absorbé par le mal à présent, ma vie redevenait certaine
16 et consciente. Après cette longue agonie, j'avais cru
17 renaître le même et rattacher bientôt mon présent au
18 passé; en pleine nouveauté d'une terre inconnue je
19 pouvais ainsi m'abuser; ici, plus; tout m'y apprenait
20 ce qui me surprenait encore; j'étais changé.

21 Quand, à Syracuse et plus loin, je voulus reprendre
22 mes études, me replonger comme jadis dans l'examen
23 minutieux du passé, je découvris que quelque chose en
24 avait, pour moi, sinon supprimé, du moins modifié le
25 goût; c'était le sentiment du présent. L'histoire du passé
26 prenait maintenant à mes yeux cette immobilité, cette
27 fixité terrifiante des ombres nocturnes dans la petite
28 cour de Biskra, l'immobilité de la mort. Avant je me
29 plaisais à cette fixité même qui permettait la précision
30 de mon esprit; tous les faits de l'histoire m'apparaissaient
31 comme les pièces d'un musée, ou mieux les plantes
32 d'un herbier, dont la sécheresse définitive m'aidât à
33 oublier qu'un jour, riches de sève, elles avaient vécu
34 sous le soleil. A présent, si je pouvais me plaire encore
35 dans l'histoire, c'était en l'imaginant au présent. Les
36 grands faits politiques devaient donc m'émouvoir beau-
37 coup moins que l'émotion renaissante en moi des

38 poètes, ou de certains hommes d'action. A Syracuse je
39 relus Théocrite, et songeai que ses bergers au beau
40 nom étaient ceux mêmes que j'avais aimés à Biskra.

41 Mon érudition qui s'éveillait à chaque pas m'encom-
42 brait, empêchant ma joie. Je ne pouvais voir un théâtre
43 grec, un temple, sans aussitôt le reconstruire abstraite-
44 ment. A chaque fête antique, la ruine qui restait en son
45 lieu me faisait me désoler qu'elle fût morte; et j'avais
46 horreur de la mort.

47 J'en vins à fuir les ruines; à préférer aux plus beaux
48 monuments du passé ces jardins bas qu'on appelle les
49 Latomies, où les citrons ont l'acide douceur des oranges,
50 et les rives de la Cyané qui, dans les papyrus, coule
51 encore aussi bleue que le jour où ce fut pour pleurer
52 Proserpine.

53 J'en vins à mépriser en moi cette science qui d'abord
54 faisait mon orgueil; ces études, qui d'abord étaient
55 toute ma vie, ne me paraissaient plus avoir qu'un rapport
56 tout accidentel et conventionnel avec moi. Je me
57 découvrais autre et j'existais, ô joie! en dehors d'elles.
58 En tant que spécialiste, je m'apparus stupide. En tant
59 qu'homme, me connaissais-je? je naissais seulement à
60 peine et ne pouvais déjà savoir qui je naissais. Voilà
61 ce qu'il fallait apprendre.

62 Rien de plus tragique, pour qui crut mourir, qu'une
63 lente convalescence. Après que l'aile de la mort a touché,
64 ce qui paraissait important ne l'est plus; d'autres choses
65 le sont, qui ne paraissaient pas importantes, ou qu'on
66 ne savait même pas exister. L'amas sur notre esprit de
67 toutes connaissances acquises s'écaille comme un fard
68 et, par places, laisse voir à nu la chair même, l'être
69 authentique qui se cachait.

70 Ce fut dès lors *celui* que je prétendis découvrir:
71 l'être authentique, le «vieil homme», celui dont ne
72 voulait plus l'Évangile; celui que tout, autour de moi,
73 livres, maîtres, parents, et que moi-même avions tâché
74 d'abord de supprimer. Et il m'apparaissait déjà, grâce
75 aux surcharges, plus fruste et difficile à découvrir mais
76 d'autant plus utile à découvrir et valeureux. Je méprisai
77 dès lors cet être secondaire, appris, que l'instruction
78 avait dessiné par-dessus. Il fallait secouer ces surcharges.

79 Et je me comparais aux palimpsestes; je goûtais la

80 joie du savant, qui, sous les écritures plus récentes,
81 découvre, sur un même papier, un texte très ancien
82 infiniment plus précieux. Quel était-il, ce texte occulté?
83 Pour le lire, ne fallait-il pas tout d'abord effacer les
84 textes récents?

85 Aussi bien n'étais-je plus l'être malingre et studieux
86 à qui ma morale précédente, toute rigide et restrictive,
87 convenait. Il y avait ici plus qu'une convalescence; il
88 y avait une augmentation, une recrudescence de vie,
89 l'afflux d'un sang plus riche et plus chaud qui devait
90 toucher mes pensées, les toucher une à une, pénétrer
91 tout, émouvoir, colorer les plus lointaines, délicates et
92 secrètes fibres de mon être. Car, robustesse ou faiblesse,
93 on s'y fait; l'être, selon les forces qu'il a, se compose;
94 mais, qu'elles augmentent, qu'elles permettent de pou-
95 voir plus, et... Toutes ces pensées je ne les avais pas
96 alors, et ma peinture ici me fausse. A vrai dire, je ne
97 pensais point, ne m'examinais point; une fatalité heu-
98 reuse me guidait. Je craignais qu'un regard trop hâtif
99 ne vînt à déranger le mystère de ma lente transformation.
100 Il fallait laisser le temps, aux caractères effacés, de
101 reparaitre, ne pas chercher à les former. Laissant donc
102 mon cerveau, non pas à l'abandon, mais en jachère, je me
103 livrai voluptueusement à moi-même, aux choses, au
104 tout, qui me parut divin. Nous avons quitté Syracuse
105 et je courais sur la route escarpée qui joint Taormine à
106 La Môle, criant, pour l'appeler en moi: Un nouvel
107 être! Un nouvel être!

108 Mon seul effort, effort constant alors, était donc de
109 systématiquement honnir ou supprimer tout ce que je
110 croyais ne devoir qu'à mon instruction passée et à ma
111 première morale. Par dédain résolu pour ma science,
112 par mépris pour mes goûts de savant, je refusai de voir
113 Agrigente, et, quelques jours plus tard, sur la route qui
114 mène à Naples, je ne m'arrêtai point près du beau
115 temple de Pœstum où respire encore la Grèce, et où
116 j'allai, deux ans plus tard, prier je ne sais plus quel dieu.

117 Que parlé-je d'unique effort? Pouvais-je m'intéresser
118 à moi, sinon comme à un être perfectible? Cette per-
119 fection inconnue et que j'imaginai confusément, jamais
120 ma volonté n'avait été plus exaltée que pour y tendre;
121 j'employais cette volonté tout entière à fortifier mon

122 corps, à le bronzer. Prés de Salerne, quittant la côte,
 123 nous avons gagné Ravello. Là, l'air plus vif, l'attrait
 124 des rocs pleins de retraits et de surprises, la profondeur
 125 inconne des vallons, aidant à ma force, à ma joie,
 126 favorisèrent mon élan.

127 Plus rapproché du ciel qu'écartée du rivage, Ravello,
 128 sur une abrupte hauteur, fait face à ala lointaine et plate
 129 rive de Pœstum. C'était, sous la domination normande,
 130 une cité presque importante; ce n'est plus qu'un étroit
 131 village où nous étions, je crois seuls étrangers. Une
 132 ancienne maison religieuse, à présent transformée en
 133 hôtel, nous hébergea; sise à l'extrémité du roc, ses
 134 terrasses et son jardin semblaient surplomber dans
 135 l'azur. Après le mur chargé de pampres, on ne voyait
 136 d'abord rien que la mer; il fallait s'approcher du mur
 137 pour pouvoir suivre le dévalement cultivé qui, par des
 138 escaliers plus que par des sentiers, joignait Ravello au
 139 rivage. Au-dessus de Ravello, la montagne continuait.
 140 Des oliviers, des caroubiers énormes; à leur ombre des
 141 cyclamens; plus haut, des châtaigniers en grand nombre,
 142 un air frais, des plantes du Nord; plus bas, des citronniers
 143 près de la mer. Ils sont rangés par petites cultures que
 145 motive la pente du sol; ce sont jardins en escalier,
 146 presque pareils; une étroite allée, au milieu, d'un bout à
 147 l'autre les traverse; on y entre sans bruit, en voleur.
 148 On rêve, souss cette ombre verte; le feuillage est épais,
 149 pesant; pas un rayon franc ne pénètre; comme des
 150 gouttes de cire épaisse, les citrons pendent; parfumés;
 151 dans l'ombre ils sont blancs et verdâtres; ils sont à
 152 portée de la main, de la soif; ils sont doux, âcres; ils
 153 rafraichissent.

154 L'ombre était si dense, sous eux, que je n'osais m'y
 155 arrêter après la marche qui me faisait encore transpirer.
 156 Pourtant les escaliers ne m'exténuaiient plus; je m'exerçais
 157 à les gravir la bouche close; j'espaçais toujours plus mes
 158 haltes, me disais: j'irai jusque-là sans faiblir; puis,
 159 arrivé au but, trouvant dans mon orgueil content ma
 160 récompense, je respirais longuement, puissamment, et
 161 de façon qu'il me semblât sentir l'air pénétrer plus
 162 efficacement ma poitrine. Je reportais à tous ces soins
 163 du corps mon assiduité de naguère. Je progressais.

164 Je m'étonnais parfois que ma santé revînt si vite.

165 J'en arrivais à croire que je m'étais d'abord exagéré la
166 gravité de mon état; à douter que j'eusse été très
167 malade, à rire de mon sang craché, à regretter que ma
168 guérison ne fût pas demeurée plus ardue.

169 Je m'étais soigné d'abord fort sottement, ignorant
170 les besoins de mon corps. J'en fis la patiente étude et
171 devins, quant à la prudence et aux soins, d'une ingé-
172 niosité si constante que je m'y amusai comme à un jeu.
173 Ce dont encore je souffrais le plus, c'était ma sensibilité
174 malade au moindre changement de la température.
175 J'attribuais, à présent que mes poumons étaient guéris,
176 cette hyperesthésie à ma débilité nerveuse, reliquat de la
177 maladie. Je résolus de vaincre cela. La vue des belles
178 peaux hâlées et comme pénétrées de soleil, que mon-
179 traient, en travaillant aux champs, la veste ouverte,
180 quelques paysans débraillés, m'incitait à me laisser
181 hâler de même. Un matin, m'étant mis à nu, je me
182 regardai; la vue de mes trop maigres bras, de mes
183 épaules, que les plus grands efforts ne pouvaient rejeter
184 suffisamment en arrière, mais surtout la blancheur ou
185 plutôt la décoloration de ma peau, m'emplit et de honte
186 et de larmes. Je me rhabillai vite, et, au lieu de descendre
187 vers Amalfi, comme j'avais accoutumé de faire, me
189 dirigeai vers des rochers couverts d'herbe rase et de
190 mousse, loin des habitations, loin des routes, où je
191 savais ne pouvoir être vu. Arrivé là, je me dévêtis
192 lentement. L'air était presque vif, mais le soleil ardent.
193 J'offris tout mon corps à sa flamme. Je m'assis, me
194 chouchai, me tournai. Je sentais sous moi le sol dur;
195 l'agitation des herbes folles me frôlait. Bien qu'à l'abri
196 du vent, je frémissais et palpiais à chaque souffle.
197 Bientôt m'enveloppa une cuisson délicieuse; tout mon
198 être affluait vers ma peau.

199 Nous demeurâmes à Ravello quinze jours; chaque
200 matin je retournais vers ces rochers, faisais ma cure.
201 Bientôt l'excès de vêtement dont je me recouvrais
202 encore devint gênant et superflu; mon épiderme tonifié
203 cessa de transpirer sans cesse et sut se protéger par sa
204 propre chaleur.

205 Le matin d'un des derniers jours (nous étions au
206 milieu d'avril) j'osai plus. Dans une anfractuosité des
207 rochers dont je parle, une source claire coulait. Elle

208 retombait ici même en cascade, assez peu abondante, il
209 est vrai, mais elle avait creusé sous la cascade un bassin
210 plus profond où l'eau très pure s'attardait. Par trois fois
211 j'y étais venu, m'étais penché, m'étais étendu sur la
212 berge, plein de soif et plein de désirs; j'avais contemplé
213 longuement le fond de roc poli, où l'on ne découvrait
214 pas une salissure, pas une herbe, où le soleil, en vibrant
215 et en se diaprant, pénétrait. Ce quatrième jour, j'avançai,
216 résolu d'avance, jusqu'à l'eau plus claire que jamais, et,
217 sans plus réfléchir, m'y plongeai d'un coup tout entier.
218 Vite transi, je quittai l'eau, m'étendis sur l'herbe, au
219 soleil. Là, des menthes croissaient, odorantes; j'en
220 cueillis, j'en froissai les feuilles, j'en frottai tout mon
221 corps humide mais brûlant. Je me regardai longuement,
222 sans plus de honte aucune, avec joie. Je me trouvais,
223 non pas robuste encore, mais pouvant l'être, harmonieux,
224 sensuel, presque beau.